

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652067

研究課題名(和文) アンドレ・マルローとコメモラシオンの政治

研究課題名(英文) Andre Malraux and politics of commemoration

研究代表者

竹内 修一 (Takeuchi, Shuichi)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：40345244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、公共の場で行われる追悼演説がもつ政治的機能を、アンドレ・マルローの『弔辞集』(1971)を題材として、考察しようとするものである。『弔辞集』に収録されているもののなかでもっとも重要なのは、第五共和国最初のパンテオン葬のさいに行われた演説のテキストである。この「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオン移葬」を分析することによって、初代文化担当大臣マルローが、まだ年若いフランス第五共和国の建国神話を創出したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to investigate the political functions of funeral oration in Andre Malraux's "Oraisons funebres" (1971). Our analysis of "Transfert des cendres de Jean Moulin au Pantheon" showed that Malraux, the first French Minister of Culture, created the myth of foundation of French Fifth Republic.

研究分野：フランス文学

キーワード：マルロー コメモラシオン パンテオン

1. 研究開始当初の背景

昨今葬儀場が「メモリアル・ホール」という名に改称される例が増えている。かつて葬送とは死者をあの世へ送り届けるための儀式であった。だが、宗教の影響力が弱まり、あの世とか彼岸とか浄土といった他界概念が縮小した結果、葬儀は生きている者たちが死者に別れを告げ、記憶するための儀式に変容した。佐藤弘夫氏(『死者のゆくえ』岩田書院、2008年)が言うように、こんにち死者は「記憶に棲む」ようになったのである。このことは、親族や友人といった身近な死者だけにあてはまるのではない。われわれが直接知っているわけではない、たとえばヒロシマやナガサキの死者たちもまた、かつては「慰霊」の対象であったはずであるが、現在では毎年8月の原爆「記念」日に、黙祷とともに、その「記憶」が呼び起こされる存在になってきているように見える。

死後の救済という観念が後退し、死者が「記憶」上の存在になったことに関しては、言うまでもなく、近代化と脱宗教化が平行して進んだヨーロッパの方が我が国よりも先行している。たとえば、黙祷という死者を追悼する非宗教的な儀礼が生まれた国であるフランスに於いて、凱旋門の下に設置された無名戦士の墓、各地に作られた第一次大戦の死者たちのモニュメント、あるいは教会や市役所等に設置された「フランスのために死んだ者たち」のリストは、戦争で死んでいった者たちの記憶を喚起するために作られたものである。かつてキリスト教の聖人の祭日で占められていた、人々の日常の時間を規定するカレンダーはこんにちでは非宗教的な記念日に彩られており、「国民の祝日」である二つの大戦が終結した日には、各地で記念行事が行われ、メディアは競うように大戦中の映像を放映したり、写真を掲載したりする。こうして人々は、「国のために」死んだ者たちのコメモラシオン(複数の人間が共通して記憶すること)を行い、戦争を知らない者たちでさえ、その記憶を共有するに至るのである。

共同体に於ける記憶の共有という問題を考えてみると、公共の場で、死者をめぐるてなされるディスクールが、とりわけ追悼演説が、興味深い研究対象としてあらわれてくる。そこには死者を或る(国民の)物語に位置づけ、その死者を直接知っているわけではない聴衆たちもまた同じ物語に属していると思わせしめるに至る、典型的なメカニズムを見ることができるからだ。

アンドレ・マルローの『弔辞集』には、この作家が第五共和国初代の文化相時代に行った演説が収められているのだが、そこで彼は、その場にいる聴衆とともに、あるいはテレビやラジオによって彼の声を聞くフランスの「国民」とともに、自分が行うのは死者たちの「コメモラシオン」であることを何度も強調している。本研究は、この『弔辞集』を通して、追悼演説によって、如何に共同体が記憶を共有するに至るのかを、考察しようとするものである。みずからの同時代者である対独レジスタンスの英雄ジャン・ムーランや強制収容所の犠牲者たち、あるいは中世の救国の英雄ジャンヌ・ダルクの記憶を、マルローがどのように呼び起こすのかを分析することによって、文学者によってなされた政治的言説が死者を利用して国民の統一を図る様子を明らかにできよう。

2. 研究の目的

公共の場で行われる追悼演説が、死者の記憶をどのように表象・再現し、それをどのような物語(=歴史)に組み込み、そうすることで、その物語を共有する共同体(国民)の統一を達成しようとするのかを、アンドレ・マルローの『弔辞集』(1971)を題材として、考察する。

3. 研究の方法

(1)マルローの『弔辞集』の実証的研究：各々の追悼演説が行われたセレモニーの様、メディアによる報道等を調査し、演説が実際にはどのようなものであったかを確定する。

(2) マルローの演説の具体的な考察:「共同体の記憶」に関する理論的研究をふまえて、『弔辞集』に収録された各テキストを分析する。

4. 研究成果

『弔辞集』に収録されているもののなかでもっとも重要なのは、第五共和国最初のパンテオン葬のさいに、マルローが行った演説である。この「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオン移葬」を分析することによって、初代文化担当大臣マルローが、まだ年若いフランス第五共和国の建国神話を創出したことを明らかにした。

この演説は、対独レジスタンスを統一した後ゲシュタポに虐殺されたジャン・ムーランの遺灰をパンテオンに移葬するさいに、共和国大統領ド・ゴールの臨席のもと、1964年12月9日に行われたものである。演説のテキストと残された映像を分析してみると、まずその内容から、ジャン・ムーランの物語がキリストの物語になぞらえられていることが分かる。イエスが様々な人々をひとりの神の下に集めていったように、ムーランはモスクワ帰りの коммуニストや右翼の生き残りたちで分裂していたフランス国内のレジスタンス運動をド・ゴール主義のもとに統一する。イエスが弟子の裏切りによって捕えられ、十字架を背負ってゴルゴタの丘を上ったように、ムーランは信じていた仲間の裏切りによってゲシュタポに捕らえられるが、決して秘密を漏らすことなく、「人間の苦しみの限界」を体験して、死んでゆく。そしてマルローは、ムーランの死後の、ドイツと連合軍との戦いをあたかも最後の審判のための戦いとして描き出し、レジスタンスの記憶を、メモリアルシオン(共に思い出すこと=記念)によって、「復活」させようとするのである。

だがこの演説が興味深いのは、その内容によってばかりではない。この演説が重要であるのは、それまで一般のフランス人たちにさして知られていたわけではない「三人称の死者」が、この演説を契機として、フランス国民にとって、とりわけマルローが「1600万人

の子供たち」と呼ぶ戦争を直接知らない若者たちにとって「二人称の死者」となることである。すなわち、巧みな演説の構成によって、ムーランは、「われわれフランス国民のために」死んだ英雄なのだと思い込ませ、ムーランの受難の物語を、フランス国民全体に「自分たちのもの」として共有させるに至るのである。第五共和国の国民は、ドイツに占領されていた時代に立ち上がったレジスタンスにこそ由来しているのであり、それは、横で演説を聴くド・ゴールが「6月18日の呼びかけ」を発した「最初の日」に始まることを、マルローは聴衆たちに訴えたのである。こうして、「殉教した」レジスタンスの指導者ジャン・ムーランは、第五共和国の言わば守護聖人となったのである。

なお、上記の研究成果は、2014年度日本フランス語フランス文学会春季大会に於けるワークショップ「死者の記憶と共同体」で発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

竹内修一 「誰が誰に同意を求めるのか? 『異邦人』最終章の自由間接話法と翻訳の問題」 『カミュ研究』第12号、2015年5月、p.1-20 [査読有].

Shuichi Takeuchi, « Justice et Meurtre : Polémique sur l'épuration et *L'Homme révolté* », *Etudes Camusiennes*, no.11, mai 2013, p.167-184 [査読有].

[学会発表](計3件)

竹内修一 「誰が誰に同意を求めるのか 『異邦人』最終章と翻訳の問題」、カミュ研究会例会、キャンパスプラザ京都(京都府京都市)、2014年12月20日。

竹内修一 「アンドレ・マルロー「ジャン・ムーランのパンテオン葬」について(ワークショップ「死者の記憶と共同体」に於ける発

表) 日本フランス語フランス文学会春季大会、お茶の水女子大学(東京都・文京区)2014年5月25日.

竹内修一「自由間接話法をどのように訳すか 『異邦人』最終章のケース」、翻訳シンポジウム、北海道大学大学院文学研究科(北海道・札幌市) 2013年3月10日.

〔図書〕(計1件)

田村毅ほか(編)『フランス文化事典』、丸善出版、2012年、750頁(項目「パンテオンと文学者」(p.434-5.)「凱旋門と無名戦士の墓」(p.436-7.)を担当).

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹内 修一 (Shuichi Takeuchi)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 40345244